訪中で得た充実した学びをこれからの実践に繋ぐ

古塩　豪
（学校経営コース１年）

中国の大学や学校を訪問し、研究発表交流や授業実践交流の機会があることを知り、これまで自分の中にあった常識を更新し、知見を広げるチャンスと考え、訪中事業に参加した。その経験の中で感じたことを、京師南奥実験学校での体育授業実践を通して気づいた日本の教育や文化との相違点に焦点を当て、私自身の考えやとらえを以下に述べる。

私は院生２人で体つくり運動のラジオ体操とフラフープ授業を行い、主にラジオ体操を担当した。中国にもラジオ体操が第１から第９バージョンまである。そこで、授業の目的は、子どもたちが日本のラジオ体操を経験することによって、中国のラジオ体操との動きの相違点を感じたり、日本のラジオ体操が生活の中でどのように位置付いているのかを知ったりすることとした。私の拙い英語でのコミュニケーションであったが、子どもたちは耳を傾けてよく話を聴き、理解しようとしていた。

まず、私が中国のラジオ体操の一部を演技すると、子どもたちからは自分もやったことがあると反応が見られた。日本同様、生活に健康の保持増進を目的とした運動が位置付いていることが窺えた。次に、私の動きに合わせて子どもたちが日本のラジオ体操に取り組んでみた。掛け声と一緒に大きな声を出しながら、笑顔でとても楽しそうに運動していた。子どもたちに感想を聞くと、中国のラジオ体操より、日本のラジオ体操の方が激しくて疲れると言っていた。私は中国のラジオ体操の方が激しいと感じていたので、子どもたちとのとらえの違いは意外であった。

授業後に京師南奥実験学校の先生方の体育授業を参観させていただくと、多様な種目を子どもたちが選択できるカリキュラムになっていて、ドリルトレーニングを中心に個人スキルを伸ばすことを大切にした授業が多く見られた。日本における部活動に近い内容であると感じた。それらから、体育授業の学習内容に関する違いがあるのだろうと推察できるが、それらについて明確に知る機会がなかったため、機会があればその点を尋ねてみたい。

授業全体を通して、スポーツはどの国も共通に楽しむことができるものだと実感できた。私たちの他にも院生が２つの体育授業（剣道とボッチャ）を行ったが、それらの授業でも意欲的に、自ら主体的に運動に取り組む子どもたちの姿が印象的であった。もちろん、運動が苦手な子、嫌いな子もいたのかもしれないが、仲間と関わり合いながら楽しそうにしている様子を見たり、言葉がうまく通じなくても真似して動くことで気持ちが通じ合っていることを実感したりする時間を通して、スポーツや体育授業、体を動かすことのすばらしさや魅力を改めて感じることができた。

また、教育課程全体が子どもたちを中心に据えて編成されていて、目指す子ども像が明確になっている点については、日本と中国で共通していた。しかし、よいところを認めて伸ばし、創造的に新たなものを生み出そうとしたりするエネルギーについては、中国で生活した短い期間の中でも圧倒されることが多く、その推進力から学ぶことや驚かされることがたくさんあった。例えば、子どもたちの国際感覚

を磨くために小学校低学年からゴルフとピアノと英語とITの４つが教育課程に編成されていることや、珠海市の人口はおよそ 80 万人であったが、大学を建設して人が集まることによって高層マンションが建ち並び、現在およそ270万人となっているなどのお話が印象的であった。

今回の訪中は、これからの将来、国境を超えて子どもたちが交流していく時代となり、それらに対応していく目の前の子どもたちにどのような資質・能力を身に付けていく必要があるかを、真剣に考えていかなければならないと強く感じる機会となった。ここで得た学びや感じたことを私自身の日々の実践に生かしていくこと、子どもたちや同僚に伝えていくことなど、まずは自分ができることから取り組み、これからの将来を担う子どもたちのために、よりよい教育の創造に貢献していきたい。

最後になりましたが、今回の訪中で多くの学びを得る機会をくださった日中の先生方、そしてこれまで中国の方と交流し関係を繋いでくださった皆様に、心から感謝致します。